

## 16. 柔道に関する意識の因子分析的研究

### —日本人柔道選手と欧州柔道選手の比較—

摂南大学 横山 喬之  
 筑波大学 小俣 幸嗣  
 筑波大学 増地 克之  
 大阪産業大学 内村 直也  
 大阪心理技術研究会 船越 正康

## 16. A study of factor analysis related to the consideration of Judo

### — An international comparison on the recognition between Japanese and European —

Takayuki Yokoyama (Setsunan University)  
 Koji Komata (University of Tsukuba)  
 Katsuyuki Masuchi (University of Tsukuba)  
 Naoya Uchimura (Osaka Sangyo University)  
 Masayasu Funakoshi (Osaka Society for Study of Psycho-Diagnostic Method)

#### Abstract

The purpose of study is a comparison on the consideration of Judo between Japanese and European university judo athletes. Analytic methods used were the factor analysis and variance analysis. For the factor analysis method, nine factors were extracted, namely : *f1.forges the techniques factor, f2.the national pure feelings factor, f3.negation feelings factor, f4.forges the body and the mind factor, f5.sports factor, f6.pursues ideals factor, f7.one's life judo factor, f8.promotes the morality of martial arts factor, and 9.non war or the reformation factor.*

Japanese judo players felt a pure desire towards Japan because it is the country where judo was founded even though it has negative feelings for the judo. The European judo players tried to learn the budo ≒ martial arts and educational aspects of judo doing it as a sport. Japanese

players at a high competitive level might realize the limitations in technology of the training they receive. Furthermore, European female judo players improved the consideration of non-competitive reformation by judo, give the suggestion to judo practice, and they will give one of the suggestion to judo practice in the future.

## 1. はじめに

柔道は日本発祥の国際的なスポーツである。この国際化の足掛かりは1951年の国際柔道連盟の発足が機であった<sup>1)</sup>。その発足以降に加盟国は増加し、2007年には199カ国の国・地域にまで達している。遂げた競技とって過言ではない。このように国際化の進んでいる柔道界にとって、世界的規模での柔道選手の意識を研究することは急務である。柔道の意識に限らず人間そのものの意識は一人一人に違いがあり、同じ文化の中で育ったものであっても一人として同じ考え方を持つ者はいないであろう。まして異国の文化の中で育つとなれば、考え方や価値観に至る意識内容に大きな違いが存在することが予想される。

先行研究<sup>2),3),4),5),6),7),8),9),10),11),12),13),14),15),16),17),18)</sup>において、日本人および日本以外の国や地域で柔道を行う柔道選手への意識調査は数多く行われている。村田<sup>19)</sup>は、「国際化の内実とそれが招来する社会の実相や人びとの物の考え方の変化などを、しかも結果として生じる変化がわれわれの求めているものであるかという価値判断も併せて明らかにしていく必要は十分にある」と述べているように、国際化が進む中で世界的規模の柔道に関する意識の研究は、さらに深める必要がある。とくに国際柔道連盟主導の今日においては欧州諸国で柔道を行う選手の意識に関して研究の余地が残されており、同世代の日本人柔道選手の意識と合わせて研究することは意義あるものとする。M. ウェーバー<sup>20)</sup>が、「西洋という基盤においては、そこにおいてのみ普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる」と述べるように、欧州諸国に伝来した柔道も同じように欧州独自の文化として発展している可能性もある。中村<sup>21)</sup>は、「今や武道は世界各地で『競技』として行われている。そうした国際化した時代だからこそ、武道人があらためて武道を日本文化として自覚する必要があるのではないだろうか」と問うている。先にも述べたように欧州に伝来した武道は欧州独自の文化として発展しているのか、はたまた日本文化として自覚されながら発展しているのか確認する余地もある。そこで本研究では日本人柔道選手と欧州柔道選手の柔道に関する意識実態を明らかにし、比較研究の視点から柔道の理解と発展に寄与したい。

## II. 研究方法

1. 調査期間：2008年5月15日～10月20日
2. 調査対象者：本研究の調査対象者は日本人柔道選手と欧州柔道選手である。調査対象となる母集団の年齢設定はユニバーシアード大会への参加可能な年齢（開催される年の1月1日現在で17歳以上28歳未満）である。
3. 調査方法：日本人柔道選手は、無作為に選出した大学に調査用紙を郵送した。また欧州柔道選手は、郵送による調査あるいは筑波大学に來学する欧州柔道選手および講道館に來館する欧州柔道選手に調査用紙の記入を依頼する。
4. 調査対象者の抽出：対象者をユニバーシアード大会参加資格者とする。調査する欧州柔道選手の中には本研究に沿う対象選手以外の回答もあるので、それらを除く有効対象数は男子104名、女子46名、計150名とする。日本人柔道選手の有効回答数は494名である。日本人柔道選手と欧

州柔道選手における有効回答数を合算する際、現状では人数の多い日本人柔道選手の意識が強く反映される。公平な因子解の抽出および因子分析後の比較なども考慮した上で、日本人柔道選手の有効回答数の中から、欧州柔道選手と同等の競技水準を持つ日本人柔道選手を男子97名と女子76名、計173名を抽出する。

5. 調査用紙の作成:本研究における調査用紙は、船越<sup>2),3),4),5),6)</sup>らによる「柔道に関する意識調査」の中で使用された50設問からなる調査用紙を使用する。この調査用紙は武道に関する表現語彙2939語句および柔道に関する表現語彙4567語句から分類した調査用紙である<sup>22)</sup>。先行研究においても日本人の柔道選手およびフランス人の柔道選手に対して使用されており、国際的な柔道に関する意識調査を行う上で信頼性、妥当性の高さが実証されている。この50設問にフェイスシート(性別、年齢、柔道経験年数、段位、競技レベル)を加えて今回の調査用紙とする。50設問についての応答は、よく当てはまる「5」、まあまあ当てはまる「4」、どちらともいえない「3」、あまり当てはまらない「2」、全然当てはまらない「1」までの5段階評定尺度とする。

6. 調査用紙の翻訳:欧州柔道選手に対する調査は、日本人学生柔道選手と同じ調査用紙とフェイスシートを使用し、それを翻訳したもので行う。フランス柔道選手に対する調査には仏訳、フランス柔道選手以外の欧州柔道選手に対する調査には英訳した調査用紙を用いる。設問の中には、「柔道は日本人の心を表す」「柔道は日本の国技である」「柔道は日本の国を強くする」「柔道は日本で古くから伝えられてきた大切なものである」が含まれていたため、公正を期すために「日本人」および「日本」を回答者の国名に置き換える。

しかし本研究の欧州柔道選手の調査対象者の中には、公用語を英語もしくはフランス語としていない国の選手も存在する。公用語による調査項目の理解と公用語以外での理解では、大きな差異が認められると考える。この点に関しては今後に解決すべき課題として本研究を進める。

7. 分析:1) 因子分析:本研究は欧州柔道選手150名と日本人学生柔道選手173名、計323名(以下、全体と略す)の回答に基づいて因子分析を行い、そこから抽出された因子を基に因子スコアを算出して比較・検討を行う。性別意識差が存在することを前提として欧州男子柔道選手104名と日本人男子柔道選手97名、計201名(以下、男子と略す)について、同じく欧州女子柔道選手46名と日本人女子柔道選手76名、計122名(以下、女子と略す)の因子分析を行う。全回答をデ

表1. 3分析の因子名と因子別固有値および全分散比

Table1. Factors name of three analysis and Eigen value and Variance ratio(%)

因子 番号	因子名	男子		女子		全体			
		EV	(%)	因子名	EV	(%)	因子名	EV	(%)
1	国粋心情	3.9	(7.9)	技術練磨	6.2	(12.4)	技術練磨	4.2	(8.3)
2	否定感情	3.7	(7.3)	国粋心情	5.0	(9.9)	国粋心情	4.0	(8.0)
3	身心鍛錬	3.6	(7.1)	身心鍛錬	2.8	(5.6)	否定感情	3.1	(6.2)
4	生涯柔道	2.1	(4.2)	武徳涵養	2.4	(4.8)	スポーツ性	2.2	(4.4)
5	技術追求	2.1	(4.2)	恐怖克服	2.1	(4.3)	身心鍛錬	1.8	(3.6)
6	スポーツ性	2.0	(3.9)	スポーツ性	1.7	(3.5)	理想追求	1.7	(3.4) *
7	武徳涵養	1.9	(3.7)	非流行性	1.7	(3.5)	* 生涯柔道	1.5	(3.1)
8	極限対応	1.2	(2.4) *	自他共生	1.3	(2.6)	* 武徳涵養	1.3	(2.5)
9	遊戯非戦	1.1	(2.3) *	純粋理性	1.1	(2.2)	* 非戦革新	0.8	(1.6) *
計		21.6	(43.0)	24.3	(48.8)	20.6	(41.1)		
同類表記数		7		6		7			
単一表記数		2		3		2			

表2. 全体の因子分析  
Table2. The factor analysis of the all Judo players

因子名	設問番号	設問内容	因子									共通性
			F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	
1 技術練習	44	柔道は努力の積み重ねが大切である	0.67	0.10	-0.11	-0.04	-0.04	0.11	0.06	-0.07	0.05	0.50
	23	柔道は真剣なものである	0.63	-0.03	-0.01	0.05	0.14	0.10	0.01	0.09	-0.03	0.44
	24	柔道にはいろいろな技があってすごいと思う	0.61	0.14	-0.06	0.09	0.03	0.03	0.15	0.10	0.02	0.43
	43	柔道の技が決まったときはスガッとする	0.59	0.10	-0.09	-0.07	0.06	-0.04	0.10	-0.09	0.30	0.49
	39	柔道では自分にあった技を身につけることが大切である	0.57	0.02	-0.07	0.00	0.19	-0.03	0.02	-0.02	0.06	0.37
	38	柔道は試練を越えて自らを鍛えるものである	0.56	-0.11	-0.25	0.16	0.17	0.16	0.03	0.13	-0.01	0.48
	42	柔道をする事は自分の喜びである	0.47	-0.07	-0.30	0.28	-0.03	0.15	0.27	0.10	0.08	0.50
	22	柔道は強いだけが能じゃない	0.39	-0.02	-0.06	0.03	0.27	-0.02	0.17	0.10	-0.02	0.27
	11	柔道は日本の国技と考えてよい	0.11	0.78	0.18	-0.15	-0.07	-0.05	-0.12	0.03	-0.02	0.69
2 国粋心情	33	柔道は日本で古くから伝えられてきた大切なものである	0.11	0.76	0.17	-0.20	-0.04	-0.06	0.00	0.12	0.05	0.68
	7	柔道は日本人の心を表わす	0.02	0.74	0.17	0.00	0.06	0.14	0.14	-0.04	0.00	0.62
	29	柔道は日本の国を強くする	-0.05	0.61	0.20	0.13	0.04	0.21	0.03	-0.09	-0.14	0.51
	3	柔道は現代において大切なものである	0.07	0.59	0.08	-0.05	0.14	0.11	0.05	0.09	0.16	0.43
	46	柔道の中にはしごきがある	0.19	-0.26	0.24	-0.24	0.08	-0.05	0.06	-0.16	0.02	0.26
	3 否定感情	40	柔道は何となくしょうもないものだと思う	-0.32	0.07	0.56	0.00	-0.15	-0.05	-0.15	0.18	0.05
45		柔道は陰気なものである	-0.16	0.14	0.56	-0.18	-0.09	-0.01	0.15	-0.01	0.07	0.43
20		柔道は恐ろしいものである	0.02	0.43	0.49	-0.26	-0.07	-0.15	0.14	-0.16	-0.01	0.57
36		柔道は自分の好きなものやりたいものの一つである	0.33	-0.08	-0.48	0.32	0.19	-0.01	0.21	-0.01	0.15	0.55
31		柔道は勝たなければ意味がない	-0.04	0.27	0.47	-0.02	-0.11	-0.07	0.12	-0.10	-0.02	0.34
15		柔道は古くさいものである	-0.16	-0.10	0.44	-0.07	-0.03	-0.21	0.04	-0.08	-0.19	0.33
27		柔道は相手を手でかかるとかかるといい	-0.14	0.30	0.44	-0.11	-0.05	0.04	0.20	0.07	0.15	0.39
10		柔道は野蛮なものである	-0.11	0.24	0.44	-0.09	-0.20	0.02	0.07	-0.34	0.00	0.43
25		柔道はこわい印象を与える	0.06	0.28	0.42	-0.12	0.00	-0.14	0.07	-0.15	0.09	0.33
6		柔道はあまりかっこよくないものである	-0.26	0.11	0.39	-0.01	-0.02	-0.14	-0.18	0.06	-0.18	0.32
4 スポーツ性	50	柔道は封建的なものである	0.02	0.15	0.32	0.13	0.17	0.09	0.01	0.03	-0.10	0.19
	18	柔道はスポーツと考えるべきである	0.05	-0.24	-0.11	0.57	0.20	-0.03	0.10	0.08	-0.01	0.46
	37	柔道は他のスポーツと同じように楽しくやっつ方がよい	0.21	-0.26	-0.08	0.45	-0.03	0.02	-0.16	0.08	0.20	0.40
	16	柔道は技と技の戦いである	0.10	-0.30	-0.12	0.44	0.08	0.16	0.17	0.09	-0.20	0.42
	41	柔道では技がものをいう	0.22	0.02	0.18	0.39	-0.02	0.05	0.10	0.02	-0.01	0.25
	4	柔道は気晴らしに近い	-0.01	0.02	-0.12	0.35	0.03	0.09	0.01	-0.04	0.04	0.15
	2	柔道は力より技である	-0.05	-0.06	-0.12	0.34	0.23	0.10	0.02	0.02	0.01	0.20
	8	柔道の世界には自由がある	0.00	0.11	-0.12	0.29	0.08	0.25	-0.09	0.13	0.15	0.23
	1	柔道は身心を鍛えるためによい	0.24	0.08	-0.13	0.08	0.59	0.09	0.02	-0.04	0.04	0.57
	F 5	19	柔道は精神を集中するのによい	0.31	0.01	-0.08	0.18	0.52	0.17	0.28	0.25	-0.02
49		柔道は礼儀を大切にし日本人らしさを育てる	0.42	0.00	-0.02	0.16	0.51	0.20	0.11	0.19	-0.06	0.55
6		柔道は気持神力を養う	0.41	0.06	-0.12	0.13	0.46	0.23	-0.12	0.00	0.03	0.49
13		柔道は平和のために役立つ	-0.05	0.22	-0.16	0.03	0.16	0.58	-0.12	0.10	0.11	0.51
14		柔道は真の勇氣を養う	0.24	0.01	-0.08	0.23	0.07	0.56	0.09	0.10	-0.10	0.47
17		柔道は人生と同じである	0.12	-0.15	-0.20	0.26	0.19	0.40	0.32	0.12	0.02	0.46
F 6	12	柔道は軌念深いところがある	0.34	0.07	-0.05	0.08	0.13	0.37	-0.08	-0.10	-0.07	0.31
	21	柔道は自分にとっての青春である	0.16	0.38	0.02	0.15	0.00	0.06	0.49	0.02	-0.01	0.43
	47	柔道は闘争であり限りなき戦いである	0.15	-0.10	0.25	0.00	0.05	0.00	0.44	-0.11	-0.05	0.31
	7	柔道には世界の人々の心をひきつける魅力がある	0.32	0.31	0.06	-0.06	0.04	0.06	0.41	0.17	0.02	0.41
	28	柔道にはその人の心がある	0.16	0.26	0.12	0.04	0.20	0.18	0.35	-0.02	-0.04	0.31
	43	柔道は正義であり正しく生きることを教える	0.19	0.06	0.12	0.12	0.20	0.40	0.15	0.45	-0.08	0.51
F 8	32	柔道は誠意を尽くし誠実であることを大切にする	0.27	0.23	0.00	0.23	0.14	0.12	0.06	0.44	-0.08	0.41
	9	柔道では攻撃精神が大切である	0.22	0.20	0.20	0.16	0.12	0.02	0.18	-0.43	0.10	0.40
	34	柔道の中には相手のことを考える思いやりがある	0.14	0.18	-0.08	0.22	0.08	0.13	0.00	0.30	0.13	0.23
	35	柔道と戦争は何の関係もないと思う	0.10	0.07	0.00	0.12	-0.02	0.01	-0.07	0.02	0.49	0.28
F 9	柔道は保守的である	-0.04	0.12	0.10	0.28	-0.04	0.05	-0.14	0.08	-0.31	0.23	

固有値(全分散比: %) 4.2 (8.3) 4.0 (8.0) 3.1 (6.2) 2.2 (4.4) 1.8 (3.6) 1.7 (3.4) 1.5 (3.1) 1.3 (2.5) 0.8 (1.6) 20.6 (41.1)

- F1・技術練習 forges the techniques
- F2・国粋心情 the national pure feelings
- F3・否定感情 negation feelings and mind
- F4・スポーツ性 sports
- F5・身心鍛錬 forges the body
- F6・理想追求 pursues ideals
- F7・生涯柔道 one's life judo
- F8・武徳涵養 promotes the morality of martial arts
- F9・非戦革新 non war or the reformation

ータベース作成後, SPSS (PAWS Statics 18) に移し, 分析は主因子法からNormal Varimaxによる直交回転を施して因子を求める. 固有値と累積因子寄与率および因子負荷並びを参照し, 経験的・論理的に解釈可能な解が得られる範囲で因子数を決定する. 2) 分散分析: 本研究を行う前提として, 柔道に関する意識において日本と欧州諸国との差異および性別による差異がありうることを仮説とする. したがって得られた因子毎に設問別・個人別因子スコアを算出し, (1) 性別×国別, (2) 競技年数別×国別, (3) 競技水準別×国別に2要因の分散分析を行う. 有意水準5%以下の交互作用が認められる項目に関しては単純主効果の検定を行い, 細部の差異を明らかにする.

### III. 結果及び考察

1. 因子分析: 表1の計欄に見る通り, 全体・男子・女子の3分析において各々9因子解を得ることができた. 全体では固有値20.6・累積寄与率41.1%, 男子では固有値21.6・累積寄与率43.0%, 女子では固有値24.3・累積寄与率48.8%であった. 因子寄与率の高さは女子>男子>全体の順であるが, 因子数は同数であった. 3分析の50設問×9因子解別結果と解釈命名過程の全

てを掲げると煩雑になるので、各9因子解の名称と因子寄与(率)の比較一覧を示したのが表1である。全体の因子名を基準に同一名称か類似名称数の合計を下欄・同類欄に示した。その下に男・女・全体のみ因子名数を単一欄に示したが、男女の因子名は全体の因子名に2/3以上が含まれる。柔道に関する意識内容に性差・競技水準差の存在を想定するならば、類似名の多い全体分析の解を優先する方が可いのではないか。その上で性別日本人との意識差を分散分析によって検証することが、分析の第一段階として有効であろう。本研究がパイロットスタディとして仮説探索段階の研究を行うことを前提に、以後の分析は全体9因子解の解釈命名から進める。解釈には負荷の高い設問を中心に、その因子軸を支配する考え方・感じ方のストーリーを把握する方法をとった。なお、因子分析の詳細は表2に示す。

## 2. 全体分析の解釈・命名 (表2)

第1.技術練磨因子4.2 (8.3%)：柔道には24.いろいろな技があり、その中でも39.自分にあった技を見つけ43.技によって相手を投げることで爽快感を感じる。そのためには23.柔道と真剣に向き合い44.努力を積み重ね38.自分自身を鍛えなくてはならない。その上で42.柔道を行うことを喜びとしている。ここには完璧な技を作るための追求心があり、自分自身が満足のいく技を完成させるために日々努力を積み重ねていくことが重要という意識を見てとることが出来る。このことから技術練磨因子と命名した。男子と女子の因子解を見ると本因子に類似した設問を持つ因子が存在する。女子は柔道の技に対する魅力・素晴らしさに惹かれて打ち込み、技術を磨きあげる意識が強いと考えられる。

第2.国粋心情因子4.0 (8.0%)：柔道を11.自国の国技と捉え33.古くから培われ、7.その国の人々の心を表すものとして考える。その上で柔道によって29.自国を強くするという国に対する帰属意識をもつ因子である。本研究の柔道選手は国の威信を背負い、大会において好成績を残すことを託されている。国を誇り、国の榮譽をかけて柔道に取り組む選手は数多い。彼らには自分自身のために柔道を行う姿勢の他に、自国のために競技する意識が強い。このことから国粋心情因子と命名した。本因子には男女ともに類似の設問を包含している例が多い。さらに男子では第1因子、女子では第2因子に同一名がある。男女を問わず柔道を行うことによって自国への想いを強める点は、国際級の選手に限らないものであろう。

第3.否定感情因子3.1 (6.2%)：柔道は40.なんとなくしょうもなく45.陰気で20.恐ろしい。36.自分の好きなものやりたいものとは感じられず、15.古くさい10.野蛮などの印象をもっている。戦争体験をもつ日本では武道に対する否定的な考え方が付いて廻る。武道の系譜をひく柔道は練習方法にしても見た目にも古典的であり、他のスポーツと比較すると華やかさを欠く。観客にとっては相手を投げ倒したり絞めたりして紳士的な競技とは見ない人がおり、否定的に捉えられる側面ではなかろうか。これらによって否定感情因子と命名した。本因子は男子に同じ名称が第2因子にあり、柔道に対する否定的な意識が強い。女子では恐怖克服因子として存在した。否定的というよりも恐怖の対象であり、それを克服する意識と読み取れる。

第4.スポーツ性因子2.2 (4.4%)：柔道は18.スポーツと考えるべきであり、37.他のスポーツと同じように楽しくやったほうがよく、武道的価値観よりもスポーツとして捉えられている。楽しさを根源におくスポーツ的要素を連想させる。しかしスポーツ的な意識にとられるのは、対象全員が現役選手であるために競技志向的になっているからであろう。スポーツ文化の中で成長している欧州選手は、とくに柔道もスポーツとしてとらえる意識が強いことが予想される。よって

スポーツ性因子と命名した。本因子は男女ともに類似設問を持つ因子が存在し、柔道をスポーツとして捉える側面を持つことが推測される。本研究の世代は柔道を競技として行い、相手に勝利をすることを目的としている。このことが、スポーツ性因子の背景にあるのではなからうか。

第5.身心鍛錬因子1.8 (3.6%)：柔道を行うことで1.身心が鍛えられ19.精神を集中することができる。さらには49.礼儀を大切にすることを育てる。つまり柔道を行うことが身体や精神に有益であると捉えられている。よって身心鍛錬因子と命名した。本因子は男女とも第3因子に類似設問を包含していた。最大負荷の設問は身心の鍛錬にあるが、他の設問は精神面を強調していた。

第6.理想追求因子1.7 (3.4%)：柔道は13.平和のために役立ち14.真の勇気を養い17.人生と同じであると考える項目が該当する。柔道を通じて勇気が養われ、人生を通じて平和な社会の構築へ導いていくことができると信じている。それは多くの柔道選手にとっての理想であり、柔道の中で日々努力追求していく意識が見える。このことから理想追求因子と命名した。本因子名は男女ともに類似した設問を包含する因子名はなかった。柔道が平和な社会を構築するための根本的な手段にはならない。しかし発展途上国における普及活動など、平和な社会の構築に貢献していることは多々ある。このような活動を通じて人間のつながりを深め、平和な社会を切り開いていくことが男女全体の意識に存在するのではないだろうか。

第7.生涯柔道因子1.5 (3.1%)：柔道には26.世界の人をひきつける魅力があり28.その人の心があらわれる。何よりも自分にとっての21.青春であり47.限りなき戦いであると捉えている。ここからは各々の柔道を、生涯を通じて目指す姿が窺える。本研究の対象は競技として柔道を行う現役であるが、競技後も継続して柔道とのかかわりを持つことが予測される。限りなき戦いには、自分自身の満足のいく柔道を模索する意識が含まれていよう。よって生涯柔道因子と命名した。本因子名は男子のみに認められる。男子には柔道を生涯続けていく環境が整っている。就職先にせよ地域の道場にせよ、さまざまな形で柔道に携われる。このことが男子の生涯柔道観を形成するのに対して、女子の後退に繋がるのではなからうか。

第8.武徳涵養因子1.3 (2.5%)：柔道は48.正義であり32.誠実であることを大切に、34.相手を思いやる気持ちも養える。その中に9.攻撃精神を尊重するならば武道的側面を見ることができ、自分だけにとどまらず他者との共存を目的とした自他共栄の精神にもつながる。よって武徳涵養因子と命名した。本因子名は男女ともに同一名称が認められた。柔道を行うことによって性に関係なく武道的側面または柔道の教育的側面が認識される。単にスポーツとして捉えるのであれば、勝負において勝利することのみに考えが行きやすい。しかし柔道を行うことによって道徳心や仁徳心を養うことができると認識する。これは他のスポーツとは異なる柔道の一面であろう。とくに女子では第4因子に位置付けられており、薙刀や剣道と同様の武道的価値すなわち武徳への関心が強いこと、欧州における武道への関心の高まりが反映されているのではなからうか。

第9.非戦革新因子0.8 (1.6%)：35.柔道と戦争はなんの関係もなく.491, 30.保守的である.307の2設問のみが該当する。最大負荷を示した戦争とは無関係の設問は現代武道観研究における反国体論因子の中核をなし、武道を戦争の手段とみなす考え方に反論するものである。回答者の中には兵役のある国からの選手がいる。日本のように戦争を知らない青年ばかりではないにもかかわらず、柔道は当然ながら戦争と無縁であり保守的でないものと認識する意識内容は高く評価されてよい。戦争は関係ないとする思考は決して保守的なものではなく、新しい認識に繋がる概念を含んでいるかもしれない。よって非戦革新因子と命名した。男女別分析では類似する設問を包含する因子名は見当たらなかったが、現役の選手によるこのような捉え方は今後の柔道の国際化

表3. 因子別分散分析結果一覧

Table3. Analysis of variance list according to factor

因子名	分析項目	性別 × 国別			競技年数別 × 国別			競技水準別 × 国別			合計
		性別	国別	交互	競技年数別	国別	交互	競技水準別	国別	交互	
F1: 技術練磨		--	--	--	--	--	--	IR<IP,NP,O ***	日<欧 *	**	3
F2: 国粋心情		--	日>欧 ***	--	--	日>欧 ***	--	--	日>欧 ***	--	3
F3: 否定感情		--	日>欧 ***	--	--	日>欧 ***	--	--	日>欧 ***	--	3
F4: スポーツ性		--	日<欧 **	--	--	日<欧 **	--	--	日<欧 ***	--	3
F5: 身心鍛錬		--	日<欧 ***	--	--	日<欧 **	--	--	日<欧 *	--	3
F6: 理想追求		--	日<欧 ***	--	--	日<欧 ***	--	--	日<欧 ***	--	3
F7: 生涯柔道		--	--	--	--	--	--	--	--	--	0
F8: 武徳涵養		--	日<欧 *	--	--	日<欧 *	--	--	日<欧 *	--	3
F9: 非戦革新		男<女 *	--	*	--	--	--	--	日<欧 *	--	3
合計		1	6	1	0	6	0	1	8	1	24

\*\*\*: p<0.001      \*\*: p<0.01      \*: p<0.05      --: 差なし      日: 日本人柔道選手      欧: 欧州柔道選手  
 IR: 国際大会入賞レベル      IP: 国際大会出場レベル      NP: 全国大会出場レベル      O: その他

表4. 第1: 技術練磨因子 (競技水準別×国別)

Table4. Forges the techniques factor (Level of participation × Classification by countries)

	日本人柔道選手			欧州柔道選手		
	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数
1. 国際大会入賞レベル	1.08	1.82	13	0.02	0.74	46
2. 国際大会出場レベル	0.04	0.90	62	0.09	0.89	22
3. 全国大会入賞レベル	0.01	0.95	20	0.29	0.95	22
4. 全国大会出場レベル	0.04	0.95	49	0.21	0.89	42
5. その他	0.06	0.94	29	0.14	0.61	18

	平方和	自由度	平均平方	F 値
競技水準別	14.20	4	3.55	4.54**
国別	3.16	1	3.16	4.04*
競技水準別×国別	11.48	4	2.87	3.67**
誤差	244.92	313	0.78	

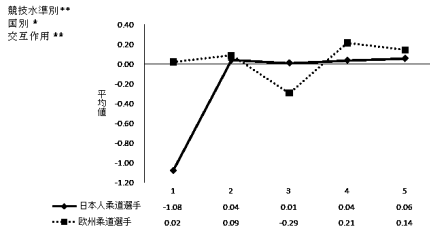


図1. 技術練磨因子 Figure1. Forges the techniques factor

表5. 第9: 非戦革新因子 (性別×国別)

Table5. Non war or the reformation factor (Sex × Classification by countries)

	日本人柔道選手			欧州柔道選手		
	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数
男子	0.08	0.74	97	-0.19	0.77	104
女子	0.05	0.63	76	0.17	0.76	46

	平方和	自由度	平均平方	F 値
性別	2.12	1	2.12	3.97*
国別	0.40	1	0.40	0.74
性別×国別	2.75	1	2.75	5.16*
誤差	170.35	319	0.53	

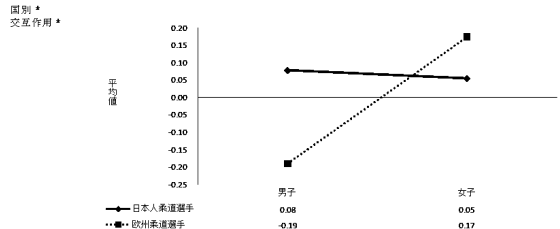


図2. 非戦革新因子 Figure2. Non war or the reformation factor

に少なからぬ影響を及ぼすものと考えられる。

これらの解を全日本男女と高段者およびフランス人の4分析と比較すると、因子数はフランス人の10・全日本女子の9・男子の8・高段者の6因子へと減少し、柔道経験が深化するほど意識構造が単純化する。その視点から見る限り本対象は柔道体験途上の若者であり、日欧・男女の広がりがあるので9因子解があつて不思議ない。しかし解釈・命名された9因子名は類似名称を含めると、4分析の中に8因子名を認めることができる。該当例のない第9・非戦革新因子を除けば、高段者で細分化する技への関心やフランス人が抱くスポーツと対比した柔道観の多様化が技術練磨とスポーツ性因子として捉えられており、他の6因子も同一名か類似名の下に網羅されていた。9因子解の下での意識水準の高低は、日欧差・男女差・競技水準差として、以下の分散分析によって明らかにすることができる。

3. 分散分析：因子別分析の全結果を表3に示した。交互作用に差の検出された第1.技術練磨因子に関しては表4と図1，第9.非戦革新因子に関しては表5と図2に記した。

第1.技術練磨因子(表3表4 図1)：表4と図1の平均値と分散分析の結果より，主効果において日欧差と競技水準差および交互作用が認められた。日本選手よりも欧州選手の方が技術練磨に対する関心が高く，競技水準に関係なく正值を示した。一方，日本選手は国際大会入賞レベルが極端に低かった。これは国内における技優位の試合に比べて，力で圧倒される経験からきたものであろう。とくに国内での入賞者が国際大会に参加する確率が高いのでトップクラスにその意識が強く，国内大会出場以下は技に磨きをかけることに意識が集中していた。

第2.国粋心情因子(表3)：日欧差が認められた。欧州選手よりも日本選手の国粋心情に対する関心が高かった。日本人の意識の中には柔道は日本で嘉納師範が創始したものであるという認識が強いが，欧州柔道選手は自国の競技と捉える意識が少ないと推測される。日本人であれば柔道と聞くと武道を，武道と聞くと日本文化を連想するであろう。日本文化の中で育った者であれば，柔道－武道－日本が深くつながっていることが理解できる。

第3.否定感情因子(表3)：日欧差が認められた。日本選手の否定感情に対する関心が高かった。先行研究においても日本人は柔道に対して否定的に捉える傾向があり，柔道を否定する意識は日本人の中に常に存在することが窺える。一方，欧州柔道選手は柔道を肯定的に捉えていた。細川<sup>7)</sup>らは、「フランス柔道人の意識は，柔道に関する否定的感情をより一層強く否定するものであると言えよう」と述べており，井浦<sup>15)</sup>らによると，ヨーロッパの柔道修行者は柔道に対してプラスのイメージをもっている。欧州選手にとって柔道は好感のもてる競技であり，否定的なイメージをもつものではない点は日本柔道のあり方に一石を投じるものであろう。

第4.スポーツ性因子(表3)：日欧差が認められ，日本選手よりも欧州選手が柔道をスポーツとして捉えていた。欧州諸国がスポーツ文化を生活化していく中で，柔道をスポーツとして捉えることは容易に想像がつく。競技としてJudoを行う世代の欧州選手であれば日本選手の比ではなく，スポーツと強く意識することがあっても不思議ではない。

第5.身心鍛錬因子(表3)：日欧差が認められ，欧州選手の身心鍛錬に対する関心が高かった。欧州選手のパワフルな柔道の背景に練習によって精神と身体両面の鍛錬を心懸ける姿勢があるのに対して，日本選手の意識水準が低い点は一考を要する問題である。

第6.理想追求因子(表3)：日欧差が認められ，欧州選手の理想追求に対する関心が高かった。欧州柔道選手は生涯を通じて柔道と向き合い，理想とする柔道像を追い求める。自分の人生と照らし合わせて柔道に没頭する意識が，欧州柔道選手の中には存在するのではなかろうか。

第7.生涯柔道因子(表3)：主効果と交互作用ともに差は検出されなかった。意識差はなく，生涯にわたって柔道を続ける考え方が日欧の男女に共通して認識されていた。

第8.武徳涵養因子(表3)：日欧差が認められ，欧州選手の武徳涵養についての関心が高かった。欧州柔道選手は柔道をスポーツと捉える一方で，武道的価値を求めて取り組む姿が窺える。

第9.非戦革新因子(表3表5 図2)：表5と図2の平均値と分散分析の結果より，男女差と日欧差および交互作用が認められた。日本人男女柔道選手間では同じ意識水準にあるが，欧州柔道選手は女子が肯定するのに対して男子が否定する。女子は柔道によって革新的な非戦思想を自らの中に築こうとするのに対して，欧州男子柔道選手はそのような意識をもっていなかった。

表3を一覧して分かるように，柔道に関する意識水準は日欧間差異が最も多く検出された。日本選手は国粋心情と柔道に関する否定感情をもつものに対して，欧州選手は柔道をスポーツと見て



心身鍛錬と自らの理想追求の原点に据える意識が強かった。それらは性・競技年数・競技水準に関係なく認められたが、競技水準の高い日本選手は技術鍛錬に消極的なものに対して欧州の女子選手は非戦革新の意識が高かった。生涯柔道の姿勢には、どの群間にも差異は認められなかった。

#### IV. 要約

本研究は、日本人柔道選手と欧州柔道選手の柔道に関する意識を明らかにすることを目的とした。対象の因子分析により9因子解が抽出され、解釈の後次のように命名された。1.技術練磨因子、2.国粋心情因子、3.否定感情因子、4.身心鍛錬因子、5.スポーツ性因子、6.理想追求因子、7.生涯柔道因子、8.武徳涵養因子、9.非戦革新因子。

日本人柔道選手は柔道に対して否定的な感情を持ちながらも、自国で創始された柔道を行う中で日本への純粋な思いを募らせる。欧州柔道選手は柔道をスポーツとして捉える一方で、武道的・教育的側面を会得しようとしていた。それらの中で競技水準の高い日本選手が技術練磨に限界を感じ、欧州の女子選手が非戦革新の意識を柔道で高める点は、今後の柔道実践に示唆を与えるのではないだろうか。

#### 参考文献

- 1) 尾形敬史他：競技柔道の国際化。不昧堂出版，第1章，p.9，1998.
- 2) 船越正康他：柔道に関する意識の因子分析的研究(1) - 質問票の検討と中学生男子への適用 - 武道学研究22 - (2)，p.191，1989.
- 3) 春日 俊他：柔道に関する意識の因子分析的研究(2) - 中・高等学校全国大会出場者の意識分析 - 武道学研究22 - (2)，p.193，1989.
- 4) 高見沢隆他：柔道に関する意識の因子分析的研究(3) - 高校生男女の意識構造比較 - 武道学研究22 - (2)，p.195，1989.
- 5) 船越正康他：柔道に関する意識の因子分析的研究(4) - 全日本男子強化選手を中心に - 武道学研究23 - (2)，p.21，1990.
- 6) 船越正康他：柔道に関する意識の因子分析的研究(5) - 日本代表選手の意識水準と競技行動事例 - 武道学研究24 - (2)，pp.65-66，1991.
- 7) 細川伸二他：柔道に関する意識分析 - フランス柔道人を中心に - 天理大学学报，pp.67-86，1992.
- 8) 永木耕介，山崎俊輔，藪根敏和：柔道愛好者の日本的スポーツ観に関する研究 - 一般的スポーツ愛好者を比較の対象として - 武道学研究29 - (2)，pp.36-46，1996.
- 9) 永木耕介他：柔道実践者のスポーツ価値志向に関する実証的研究 - 特に伝統性と近代性の視点から - 武道学研究30 - (2)，pp.1-8，1997.
- 10) 村山輝志他：英国における柔道の意識調査について。体育学研究，24 - (3)，pp.247-257，1979.
- 11) 山崎俊輔他：フランスと日本における柔道実態調査。武道学研究16 - (1)，pp.165-166，1984.
- 12) 中島 猷他：西ドイツ柔道選手に対するイメージの因子分析的研究。武道学研究22 - (2)，pp.183-184，1989.
- 13) 武内政幸他：オーストラリアにおける柔道選手に対するイメージの因子分析的研究。武道学研究22 - 2，pp.185-186，1989.
- 14) 山崎俊輔他：英国における柔道のイメージ特性について。武道学研究23 - (2)，pp.19-20，1990.

- 15) 井浦吉彦他：ヨーロッパの柔道クラブにおける修行者の実態について. 武道学研究24 - (2), pp.193-194, 1991.
- 16) 山崎俊輔他：ニュージーランド柔道人の日本的スポーツ観に関する研究 - 日本柔道人との比較を通して -. 武道学研究30 - (3), pp.10-18, 1998.
- 17) 岡田弘隆他：フランスと日本の青少年柔道練習者の実態と意識調査. 武道学研究33 - (1), pp.31 - 39, 2000.
- 18) 山崎俊輔他：アメリカ柔道人の「嘉納柔道観」への反応について - 日本柔道人との比較から -. 武道学研究33-別冊, 29, 2000
- 19) 村田直樹：中村敏雄著作集6 スポーツの比較文化学. 菊 幸一編, 創文企画, 第4章 国際化のなかの柔道, pp.285-286, 2008.
- 20) M・ウェーバー：宗教社会学論選. みすず書房, p.5, 1972.
- 21) 中村民雄：今, なぜ武道か. 日本武道館. p.369, 2007.
- 22) 船越正康：現代武道観研究. 武道学研究11 - (3), 1979.